

Interview
**Before
After**

vol.03

新社屋に受け継がれる 筆先に込めた創業 520 年の思い

博多と天神を結び、集う
新たな広場のランドマークに

株式会社 平助筆復古堂

本社
福岡市中央区春吉 3-3-9
平助筆復古堂ビル 4F
TEL : 092-761-5122



1501年(文亀元年)、「筑紫筆」の名匠・河原田五郎兵衛が創業。「復古堂」の名は、江戸中期に藩主・黒田斉隆から与えられた。独自の商標である「平助筆」をはじめとする筆の製造、書道具や和文具の販売、書道教室などを運営。



株式会社 平助筆復古堂

代表取締役社長 河原田 明 氏

1932年 福岡県福岡市生まれ

1955年 早稲田大学を卒業し平助筆復古堂に入社、
10代目平助を襲名

博多の地の利が生み出した 「筑紫筆」の歴史

博多は、かつて「博多の津」と呼ばれ、古くから中国の文化が渡来した地でした。毛筆の起源をたどると、延暦年間（732年～806年）にまでさかのぼります。当時、国の主要な機関である大宰府政庁を背景に、大陸との文化交流が盛んだった博多では、役人や商人たちが文具を必要とし、中国の筆も多数持ち込まれていたと言われています。その影響から、博多では中国の筆を参考にした製筆の技術が発展したのではないかと考えられています。

また、今の福岡市早良区脇山あたりが良質の竹の産地だったことも大きく影響していました。しなやかな竹の軸に、中国伝来の優れた製筆の技術が組み合わさったことで、博多は「筑紫筆」の名称で全国屈指の製筆業の地となったと思います。

もう一つ、独自の製筆業が盛んになったことには理由があります。それは、中国が漢字文化であることに対し、日本が「かな文字文化」であったことです。漢字を書くために作

られた中国の筆では、柔らかな曲線が必要とされるかな文字が書きづらいという問題があったようです。国内で、かな文字が書きやすい筆の需要が高まるとともに、博多の製筆業も発展していきました。

創業は室町時代後期。 遠祖は「筑紫筆」の名匠

弊社の創業は1501年、室町時代後期の文亀元年です。創業者・河原田五郎兵衛（豊前国河原田城主前田左京太夫清助の後商・博多年行事の一人）は、博多の製筆業者であり、全国に知られる「筑紫筆」の名匠の一人に数えられていました。

文禄年間（1590年代）には当主の河原田平次が、朝鮮出兵のため肥前名護屋城を築城した太閤豊臣秀吉を陣中見舞いし「筑紫筆」を献上しています。

江戸時代には、当主が河原田家初代平助を名乗るようになり、これ以降、歴代当主は平助を襲名することになります。天明年間（1780年代）、4代目平助が当時の福岡藩主・黒田斉隆公より、藩歴代御用筆の栄誉をいた



左から 10 代目平助・河原田明氏、11 代目平助・河原田浩氏
(後方の復古堂の扁額が富岡鉄斎筆)

だくとともに、製筆業としての由緒をたたえ「復古堂」の商号を与えられました。
しかし、江戸末期から明治の初期にかけてさまざまな業者が「筑紫筆」を製造するようになってきます。「筑紫筆」と名乗りつつも、福岡以外の地域で製造したものや品質が劣悪なものが出回るようになり、その名と品質を維持することが難しくなってきました。そこ

で 8 代目、9 代目の親子が、このままでは業界そのものの衰退につながってしまうことを危惧し、同業組合を結成。それを機に、福岡の製筆業者は各自で商標を付けるとともに、高い技術の維持に努めることを決意しました。平助がこの際に、自らの顔写真を筆軸に貼付した「平助筆」を商標とし、明治 28 年からは宮内省御用達の栄を賜りました。

穂先まで細く、繊細さを持つ 「平助筆」の誕生

「平助筆」の特徴は、「すき穂」と呼ばれる形状にあります。一般的な、やや丸みのある「つみ穂」と呼ばれる筆と比べ、毛をすいているため穂先にかけてすっと伸びて、ほっそりとした形状です。毛量が少ない分、鹿、イタチ、タヌキなどの獣毛を組み合わせていることで、強くてしなやかな筆先を生み出しています。一見、細すぎるように感じるかもしれませんが、この形状だからこそ、たつぷ



上が平助筆、下が一般の筆

りと墨を含んだ時に、ほどよく膨らみ、なめらかで繊細な書き味が生まれるのです。

この毛の部分は、すべて職人による手作り。一つひとつ「毛もみ」と呼ばれる作業を行い、最後に10代目平助である私が、品質の確認を行い、しっかりと見極めます。以前は、福岡にも職人がいたのですが、後継者がおらず、現在は広島や京都・奈良の職人の方をお願いします。

「平助筆」は、かな文字のように女性的で優しい文字にふさわしく、「一度使うと手放せない」と何十年も愛用していただいたり、親子三代で使っていたりするお客様もいらっしやいます。



福岡市博物館に収納されている宮内省御用筆
(上：大正時代、下：明治時代)



広い店内でゆっくりと用品を選べる



おしゃれな和風文具も多く取り揃える

事の起こりは博多と天神を結ぶ 「春吉橋」の架け替え

戦前までは麴屋町^{こうじや}、今の福岡市博多区下川端に店舗がありました。しかし、1945年の福岡大空襲で店舗は全焼。以来、戦前までは自宅であった現在地の春吉を店舗としてきました。

ところが、2014年、突然、国土交通省から老朽化した春吉橋の架け替え事業に合わせた土地区画整理の話が持ち掛けられたのです。店舗を含む所有地は、博多と天神を結ぶ^{はるよしばし}春吉橋のたもとにあります。ここは国道202号でもあり、「国体道路」とも呼ばれる交通量が多い主要な道路です。

また、横を流れる那珂川^{なかがわ}は福岡県が管轄、この橋の整備とともに進められている「春吉橋賑わい空間」事業には福岡市も加わるといふ大規模なプロジェクトに、この所有地が関わることになったのです。

交渉の窓口である国土交通省から、河川の整備・護岸工事のために、土地の一部を削らせてほしいという提案が持ち上がりました。市民の暮らしのために土地を提供することに

反対する気持ちはないものの、その部分を提供してしまうと、とても新しい社屋を建てるだけのスペースを確保できません。交渉を重ねた結果、北側の一部分を提供し、残りは平地にして橋の架け替え工事の期間は、資材置き場として2年ほど使用されることになりました。

2017年、工事が始まると同時に、天神に仮店舗と事務所を移転。明治40年建築のためいつかは建て替えなければと思っていた古い店舗であったものの、これらの出来事がありに突然のことと、その後の新社屋をどうするのか、何の展望も、設計や建築に関する知識もなく、途方に暮れていました。

その時に相談したのがメインバンクの福岡銀行天神町支店です。当時の支店長がFFGBビジネスコンサルティング（以下…FFGB C）につないでいただきました。何から取りかかればいいのか分からない私たちに、まさに「手取り足取り」アドバイスをしていたいただきました。資金計画から新社屋の設計、施工、賃貸の管理、清掃業者や火災保険の選定に至るまで、安心して全てお任せすることにしたのです。

新社屋は都市公園をつなぐ エントランスを採用

当初は、「新社屋を何階にするか」ということですら、どう決めればよいのか悩むような状況でした。FFGB Cに間に入っていたことで、業者の方に直接言いづらい要望はスムーズに、分かりにくいことは私たちが理解できるように、かみ砕いて説明していたと感じています。

東京・京都にも様々な社屋の視察にも行きました。その時の経験を参考にしながら、新社屋の設計を数社に依頼し、コンペで決定。川沿いを眺める全面ガラス張りの外観が目を引き6階建の新社屋の大きな特徴は、エントランスの階段です。ちょうど春吉橋のもとは1階と2階の間を通る道路が坂になっていことから、1階と2階のエントランスそれぞれにつながる階段を設置し、回遊性をもたせました。

計画されている「春吉橋賑わい空間」^{うかい}は、現在、架け替え工事のための建設された迂回用の橋をそのまま残し、歩行者が行き交う道路にするそうです。那珂川沿いを挟んだ清流

公園と合わせて、音楽や祭りなど様々なイベントが開催できるような都市公園の機能を持つ空間になるでしょう。

この新社屋は、まさにその歩行者が歩く出入り口の部分。春吉橋からそのまま歩いて入れる設計ですので、一息つけるような憩いの空間になればと思っています。私たちの店舗兼事務所は4階に、その他のフロアには、多くの方が憩いの場として利用できるようなテナントに入っていただければと思っています。



那珂川に架かる春吉橋から望む新社屋

500種類以上の筆がそろそろ 新店舗がオープン

2021年5月11日に、新しくオープンした新店舗の4階入り口には、明治・大正の文人画家で、儒学者でもある富岡鉄斎画伯による「復古堂」の書を展示しています。これは、空襲で焼失から免れた自宅に保管していたため、今もそのまま残っており、弊社では、この文字をロゴマークに使用しています。

店内は、常時500種類以上の筆を用意し、文鎮、水滴など書にまつわる用品を集め、販売しています。料紙の種類も増やし、色柄入りの色紙、唄短冊、書関係の書籍、さらにはのし袋や葉書、便箋、鳩居堂製のお香といった贈り物にもふさわしい小粋なものをそろえました。

店舗内では、書道教室も開催。子どもの頃に習い、また改めて始めたいという主婦の方などが多くいらつやっています。好評なのがデザイン書道です。グラフィックデザイナーの方が仕事上で書かれる機会があるため、基礎をしっかりと学びたいの思いで通われています。反響が多く、参加された受講



店内には常時 500 種類以上の筆が並ぶ

者の方は熱心に組み合わせています。

1階のエレベーター入り口の道路沿いに、筆などを飾ったショーウィンドーを設けています。ここにある石碑には、「えたくみと共に宿りし川沿いの 河原田の家わすられなく」の歌が刻まれています。これは、宮中御歌所寄人・阪正臣氏ばんまさのむねが現敷地にあった河原田家別邸に宿泊された際に詠われた、自筆の歌碑です。昭和3年（1928年）の昭和天皇即位の礼に際して、現在の福岡市早良区脇山が

お問い合わせ

株式会社 FFG ビジネスコンサルティング
不動産ソリューション部

福岡市中央区大手門一丁目8番3号

FFG本社ビル

TEL. 092-723-2372

不動産鑑定士や一級建築士等の資格を保有し、豊富な経験を持つスタッフが、貴社が抱える様々なニーズに対応します。



不動産ソリューション部 内田部長

大嘗祭主基斎田だいしようさいすきさいでんに選定され、勅命により、主基殿の屏風絵作成にあたった山元春挙氏やまもととしゆんぎょと一緒に阪氏が来福された時のもの。これも、復古堂の歴史を記す、貴重な財産の一つです。

2014年から、思いもかけず始まった社屋の建て替え。FFG、福岡銀行天神町支店、FFGBCのお力をお借りして、ようやく完成することができました。博多の新しいシンボルとして生まれ変わる春吉橋とともに、520年の歴史を経て、私たち復古堂もまた、新しい歴史を刻んでいきたいと思っています。